

教理を表明していない、と見なしています。この非難は、根拠がないものではないのです。他方、福音の宣教は、この教理的な不確かさによって、容易にはなりません。なぜなら、プロテスタントが教理について言うことは、人やグループによって大きく変わる、という印象を、他者に与える可能性があるからです。しかし、このハンディキャップには、良いところもあります。改革派教会は、内包する教理的立場の多様性を、隠すどころか、豊かさとして評価しているのです。また、改革派教会は、この多様性が表明される場である、シノッドが、宗教的民主主義の例示的なモデルであることを、誇りを持って世論に示しています。たとえ、あれこれの点において多数決があるにせよ、多数決は少数派を押さえつけようとするものではなく、文書には、たえず異なる立場についての言及があります。そういうわけで、フランス・プロテスタントは、数世紀の宗教的闘争の歴史を有するヨーロッパにおいて、キリスト教の、現代的で真に福音的な形態を体現していると、自認しています。このようなキリスト教においては、愛によって闘争や対立を調整することが、教義的権威主義に優先されなければならないのです。この教義的権威主義は、ヨーロッパ大陸において、数世紀に亘り、数多くの、そしてしばしば恐るべき分裂を生み出してきました。今日、フランスにおいて、プロテスタント（とりわけ改革派）の持つ独自性は、民主主義と寛容に好意的なキリスト教のあり方を、教会自体の中に守ることにより、宗教改革の伝統を維持していく、という点にあります。それゆえ、フランス・プロテスタントは、ヒエラルキー的、権威主義的であり、今後ともそうあり続けるであろうカトリック・モデルに対して、キリスト教の一つの現代的形態として、自らを示していくことが可能なのです。

結論

結論として、私は、2つの点を強調したいと思います。第一の点は、レオナルドと共に、私が、フランスの「プロテスタント的人間」と呼んだものに関係しています。そこには、ラテン系の国におけるプロテスタントという、アイデンティティの

逆説がありました。イタリア・スペイン・ラテンアメリカ諸国といったラテン系の国は、アングロ・サクソンやゲルマン系の、北のプロテスタント社会を特徴づけている伝統や精神性には、縁がないのが普通です。しかし、フランスのプロテスタントは、諸世紀を通じて、活動的に、しばしば威信をもって、フランス文明の構築に参加してきました。ここで例を挙げることはしませんが、この国の文化・科学・政治・経済において、プロテスタントの有名人が果たした重要な役割は、すべてのフランス人に知られています。文学においてはルソーとジイドが、政治においては数名の首相がおり、経済においてはプジョーとプロテスタントの銀行家たちの名が知られています。事実、ラテン・ヨーロッパにおけるフランス文明の独自性は、その一部を、過去及び現在において、プロテスタントの有力な少数派を擁している、という事実に負っています。それは、大陸の十字路にあるというフランスの位置づけの独自性を、すなわちフランスが、それが属するラテン諸国と、近接するアングロサクソン・ゲルマン諸国との間にある、ということが意味するものを、多少なりとも説明しています。

フランス・プロテスタントは、それ自体、十分に特殊な存在であり、矛盾する諸特徴を備えています。すなわち、ピューリタンのであると同時にリベラルであり、伝統的ではあるが個人主義的であり、国家への強い関心を持つ反面、自発的で反権威主義的です。このフランス・プロテスタントは、未来も存在し続けるのでしょうか。私にはわかりません。しかし、もしかしたら、改革派の伝統は十分に強固で、他の出自による新しいメンバーをも吸収・同化していけるかもしれません。

将来、プロテスタンティズムがフランス社会の中で果たすであろう役割と、それ自体の展望に関しては、問題となるのは以下の点です。今日、プロテスタンティズムは、対話の様々な形式を促進するのに熟練した、多様で多元的な一つの霊的家族、として定義されています。この点において、それはイギリス国教会に似ています。プロテスタンティズムは、今日のフランス人に、現代西欧社会の諸要素に適合的なキリスト教、というものを提案することが可能なのです。これが人を引きつ